

## 二・二六事件と山縣有朋

児玉 寛嗣

二・二六事件に関する本を読んだ。アフリカの国々などではクーデターは珍しくないが、九十年近く前には日本でもクーデターが試みられたことをあつた。改めてその根源を考えてみた。いろいろな見方があるが、それは陸軍内の権力闘争でもあつた。一連の事件は次のように説明できる。

考えの凝り固まつた一部の将校たちが入隊直後の兵卒などを指揮して政界や軍の幹部を次々と殺害、自分たちの主義・主張に近い思われていた軍幹部の一派に決起を促した。しかし、それまでは勇ましいことを言っていた幹部たちも腰が引けて動かなくなつた。軍の最高指揮官である天皇が「反乱軍は逆賊」と糾弾したため、クーデターはあえなく失敗に終わった。だが、軍の暴力が政治家たちに恐怖心を植え付けて、軍が政治を牛耳り、戦争に向かう道を開いた。クーデターの根底にあるのは「天皇の命令は絶対」という考えだつた。将校たちは「天皇の取り巻きが悪いので、天皇が思うようにやれない。天皇は我々の主義・主張に共感するはずだ」と誤解していたのだつた。

話は明治初期に遡る。陸軍を統括する山縣有朋は西郷隆盛の不穏な動きに対して大久保利通に「大きな反乱が起きると国内の統御は難しい」というと、大久保は「統御は難しくない。国家が危難に至れば、天皇の裁可を仰ぐのみ」と言つた。山縣は伊藤博文らの政治優先のやり方に不満を持っていたが、大久保の一言で統帥権独立の道を開いた。それは議会や政府に干渉されることなく、天皇が命令を下せば、軍は動ける、という不文律であつた。山縣は軍人が政治に介入しないようにと軍人勅諭を発令し、軍人の動きにブレーキをかけたが、昭和に入りその縛りは反故にされるようになった。

しかし、軍の予算は国会で決めるものであり「統帥権独立」は昭和になつて政党政府と軍と対立の火種となつた。敗戦により軍は解体、皮肉にも軍の礎を築いた山縣のアイデアが誤解されて軍を滅ぼす結果となつた。